SEXIAL BATTLE D2
成人向
コミック

ゼシカ編

ゼシカは時折、魔物退治の依頼を引き受けることがあった。
高レベルの魔道士であるゼシカはこれまでも1人でそうした依頼を受け、
解決している。
今回もまた、辺境の村から魔物退治の依頼があるとのことでやって来た。
その村では以前から、若い娘をモンスターへの
いけにえとして捧げているという。
そのせいか、それとも魔物への恐れのためか、
村には若い女の姿は見られない。
なんとも馬鹿げた話だ。ゼシカはふたつ返事で依頼を引き受けた。
話し合いの結果、ゼシカが今回のいけにえとして出向くこととなる。
村娘のフリをして、モンスターが油断しているところを
倒すという囮作戦。
オドオドとする村人たちに自分のことは心配しなくてもいいと
元気付け、目的の塔へと赴いた。

「イケニエはいつもここで拘束されます。
ゼシカさんにも、同じようにしてもらいます」
モンスターを油断させるために必要なことだ。
しかし、拘束されたままでは戦うこともできない。
「モンスターが来たら、ここを引いてください。
そうすれば、拘束具は外れます」
言われた通り試してみると、確かに拘束具は簡単に外れる。
これならば問題はないだろう。ゼシカは余裕の笑みさえ見せて、
村人たちを安心させる。
そして村人たちを帰し、1人で静かな塔の中に残った。

それから数時間、モンスターの現れる気配はなかった。
若い娘をいけにえに求める魔物とは、いったいどんな奴なのだろうか。
暇を持て余したゼシカは、これまでの経験から様々な対応策を練る。
一通り考え、魔物の種類を二三種にまで絞り込んだ。
もし知らない魔物であっても、数パターンの攻撃方法を練り込んでおく。
これでもう、どんな魔物が来ても恐れることはない。
そう考えた矢先、ゆっくりとした足音が響いてきた。
(来たわね……二本脚の魔物。そうなると、やっぱり……え！？)
そこに現れたものを見て、ゼシカは目を丸くする。
想像していたどのモンスターでもない。それは、普通の人間の男だった。
「……あなたは？　あの、今からここには
得体の知れないモンスターが来るのよ？」
村人だろうか。それとも旅の者か。
男は無表情でゼシカに歩み寄り、手にした杖を突き立てる。
「なに？　あなたはいったい……」
ゼシカの問いに、ニンマリとした笑みで応える男。
その瞬間、ゼシカは自分の魔法力が抜けていくのを感じた。
「え！？　な、なに！？　なにをするの！？」
男の持つ杖にMPが吸い取られているのだと分かった。
しかもかなり急激に吸われ、めまいに襲われる。
「ちょっと、なにするのよ！　そんなことしたら、
モンスターと戦えないじゃ……」
慌てて拘束具を外そうとする。
しかし、先ほどはスルリと外れたはずの拘束具が、ビクともしない。
(なにこれ！？　いったいどういうこと！？)
何度試してみても、拘束具は外れない。
うろたえるゼシカを見て、男は笑いを堪えきれなくなった。
「くっくっくっ。お前は騙されたんだよ……ゼシカさん」
「なんですって！？」
拘束具のことか。それ以前のことか。
「ま、まさか、魔物退治の依頼そのものが……？」
ゼシカの言葉を肯定するように、男が笑う。
そして、身動きできないのをいいことに、
ゼシカの体をまさぐり始めた。

「なっ、なにするの！？　触らないで、いや！　来ないでよ！」
「これがゼシカさんの体か……噂以上の巨乳じゃないか…」
無防備な乳房を揉まれ、嫌悪と不快感に悲鳴をあげる。
その声や仕草も男を悦ばすだけらしい。
ニンマリと舌なめずりする男に、ゼシカは強烈な怒りを向ける。
「つまり今回の依頼は、あなたが仕組んだ罠だったっていうことなのね！？」
「そうさ。天才魔道士にして絶世の美女と名高いゼシカさんと、
こうしてお話しするためにね」
「ふざけた真似を！　この程度の拘束で、私をどうにかできるなんて思わないで！」
まずは簡単に使える魔法で、この拘束から抜け出す。
そして、魔法力を吸う邪魔な杖を取り上げてやればいい。
男は屈強な戦士でもなければ、熟練の魔道士にも見えない。
本気を出せば、すぐに倒せるだろう。
そんなゼシカの考えを見抜いたのか、男は愛撫の手を強めてきた。
（ああっ！　駄目、変なところを触られて、集中できない！）
「くくく、いいオッパイをしてるな。
尻もふかふかで、魔道士にしておくのはもったいない」
男の手が体中をまさぐるように触れてくる愛撫に、ゼシカは翻弄されていた。
時に強く、時にくすぐるように、そして巧みに愛撫してくる男。
敏感な部分を的確に、
それが魔法に集中させないためだとすれば、かなりの策士だと言える。
（いけない。このままじゃ、こんな男にいいように触られちゃう！）
なんとか抜け出したいが、
口から漏れるのは呪文ではなくこそばゆさからの喘ぎばかり。
次第に息が上がってきて、更に呪文を唱える余裕がなくなっていく。
「どうした？　抵抗しないのか……それなら！」
「きゃあ！？　や、やめて！」
男が乱暴に、ゼシカの衣服を破り始めた。
生の乳房がさらけ出され、ゼシカの動揺は濃さを増していく。

怒りと恐怖、快感と喚きが喘ぎとなって溢れ出す。
（こ、こんな奴に好き勝手もてあそばれるだなんて、そんなこと許せないんだから！）
どう腕を引っ張っても、拘束具は外れない。
どれほどジタバタともがいても、男が抱きとめてしまう。
ならばやはり呪文で抵抗するしかないのだが、口から漏れるのは喘ぎばかり。
背後に回った男は、抱きしめながら乳房をこねくり回してくる。
その快感にめまいを起こし、その度に魔法力が抜けていくのが分かる。
突き立てられた杖は、ゼシカの心の隙間を見定めているらしい。
このまま魔法力を吸われてしまっては、魔法での抵抗もできなくなってしまう。
（感じちゃ駄目。そんなの許せないし、なによりも魔法力がなくなっちゃう！）
すくい上げられるように乳房を揉まれ、そしてそのまま乳首をこねられる。
その快感に思わず声をあげてしまい、魔法力も吸われてしまう。
喪失感に恐怖を覚え、ちょっとした愛撫でも必要以上に感じてしまっていた。
「いい声で喘ぐじゃないか。さすがの天才魔道士も、ただの女ということか」
「くっ！　こ、こんなことで、私が屈したりするわけないでしょう！？」
「その強がりがどこまで持つか見物だな」
男の余裕は崩れない。愛撫の手は、まるで恋人にするかのように甘く淫らだった。
性の快楽になれていないゼシカは、魔法力を吸われるまでもなく、
その愛撫だけでめまいを起こしてしまうほど。
（なんてこと……村人に騙されて、魔法力を吸われて、こんな奴にもてあそばれて）
自分のうかつさが腹立たしい。それ以上に、感じてしまっている自分が情けない。
様々な感情がわき上がって、ゼシカはひどく混乱していた。
ただ敗北するだけならまだしも、こんな辱めを受けたことはない。

「つくは、はぁ、はぁ……ゆ、許さないわよ。これ以上は、はぁ、はぁ……」
「なにを許さないって？　この程度で音をあげられちゃ、面白くないぜ？」
にやにやと笑う男に、更なる怒りがわき上がる。
しかしMPは底をつき、もはや簡単な攻撃魔法さえ使えない状態。
(ど、どうしよう……このままじゃ、こんな卑怯な奴に負けちゃう)
命を取ることはないかもしれないが、それ以上に大切なものを奪われそうな気がする。
いや、すでに魔道士としての誇りを奪われている。そして、女としての誇りも。
男の手はすでに胸だけでは足りなくなっているようで、尻や太もも、そして大切な股間にまでも伸びていた。
服の上からとはいえ、女性として最も大切な部分をまさぐられるのは恥ずかしい。
しかもこちらの同意を得ない行為だ。陵辱されているということ。
(こんなこと絶対に許さない！　なんとか反撃の隙を見つけないと！)
腕は拘束されているが、脚はまだ自由だ。しかし、男を蹴り上げようにも、上手く力が入らない。
肉弾戦が不得手である自分を恥じる。魔法が使えなければ、なにもできないというのか。
「なんだ。もう諦めるのか？　それなら、もっと楽しませてやらないとな」
言うが早いか、男は更に衣服を剥ぎ始める。
なんとかやめさせなければともがくが、その程度の抵抗では男の手を止めることはできない。
(あぁ、見られちゃう！　こんな奴に、私の大事なところを見られちゃう！？)
ついに下着まで剥ぎ取られ、陰部をあらわにされる。

淫らに光る男の目に、ゼシカは思わず恐怖の喘ぎを漏らしてしまう。
「くくく。天才魔道士も裸になればただの女だな……
もうこんなに濡らしてやがるし」
「そ、そんなことないわ！　いやっ、触らないで！？」

男の手が、遠慮なく股間に伸びてくる。
ぎゅっと脚を閉じても、男は無理矢理その指を股間に潜り込ませた。
「ほうら、こんなにクチュクチュしてるじゃないか。触られて感じたんだろう？」
「ふざけないで！　こんなコトされて、感じたりするはずないでしょう！？」
「口で反論しても、体は正直だぜ？　ほら、ここも気持ちいいんだろう？」
「ああ、あ！　やめて、触らないで。そ、そこは駄目……あああああ！」
男の指が陰唇をこねくり回す。
ヒダヒダをまさぐられ、引っ張られ、掻き分けられた。
敏感な谷間を、男の太い指が何度も何度も行き来する。
ねっとりとした愛液が絡む指は、ゼシカに性の快楽をもたらしていた。
（駄目っ。わ、私、こんなことされて感じてる。
触られたくなんてないのに、こんなにいっぱい濡らしちゃってる！）

ぬちょぬちょと愛液の粘つく音が響く。
ゼシカは我知らず、脚の締め付けを緩めていた。
「ほら、ここはどうだ？
クリトリスをつままれると、泣きたくなるほど気持ちいいだろう？」
「ひぁああ！　ああ、だ、駄目！　そこ、そこは感じすぎて……っっ！！」
指先で丁寧に包皮を剥き、柔らかな粘膜の突起をこねくり回す。
クリトリスをもてあそばれる快楽は羞恥や怒りさえ忘れさせるほどで、
ゼシカはあられもない悲鳴をあげ続ける。
（感じたくなんてないのに！　こんな風にされて、
イキたくなんてないのに！）
心とは裏腹に体は快感の衝撃に跳ね上がり、
ゼシカを絶頂へと導いていく。
男はそれを分かっているのか、
容赦なくクリトリスばかりを攻め立てる。
「ほら、イけよ。イっちまえ！」
「あぁあ、いや！　イキたくなんてないのに、
私、もう我慢できないいいい！！」
ゼシカの喘ぎに満足げな笑みを浮かべ、男は指戯に力を込める。
十二分に勃起したクリトリスを指先でつまみ、
絶妙なタイミングで絶頂へと導いた。
「んぁあああああああ！！　いやっ、
イっちゃうううううううううう！！」
快楽の叫びと共に残りすべての魔法力が
吸い取られていき、ゼシカは意識を失った。

「んん……ん？　あれ、わ、私……な、なにこれ？」
目が覚めると、全身をガッチリと拘束されていた。
脚の自由も奪われ、もはや男を蹴り上げることも許されない。
「ようやくお目覚めか。それじゃ、第2ラウンドを始めるとしよう」
(そっか…さっきコイツにイカされて……くっ！まだなにかするって言うの！？)
「これからが本番だぞ。さぁ、今度は簡単に気絶してくれるなよ？」
男の顔が、股間へと寄せられる。
軽い悲鳴をあげてもがくが、全身を縛られていてはどんな抵抗もできはしない。
じゅるり、とわざとらしく音を立てて、ヴァギナにしゃぶり付いてくる。
指とはまったく違う快感が生み出され、ゼシカは早くも喘いでしまう。
(あぁ、駄目！！さっきイったばっかりだから、こんなことされたらまたすぐに！！)
絶頂感がわき上がる。悔しさと怒りも共に湧くが、やはり快楽には勝てなかった。
「くくく……どうした？　イキたいのか？」
「え？　そ、そんな……」
男は先ほどと違い、ゼシカを絶頂には導かなかった。
寸前のところで愛撫を止められ、ゼシカの心に不満が生まれる。
(なに？　いったいこいつは、なにがしたいって言うの！？)
絶頂できなかった不満が怒りに変わる前に、男は愛撫を再開する。
したと指を巧みに使い、クンニと指マンでゼシカを快楽で満たしていく。
(ま、また来る……もう少しで、い、イキそう……あ、ああ！？)
ゼシカの快楽を制御しようというのか、男はまた絶頂の寸前で愛撫を止めた。
(もしかして、イカせないように焦らしてるの！？　な、なんでそんな……？)
ゼシカの戸惑いを分かっているかのように、男はにんまりと笑って愛撫を再開する。
そしてまた絶頂の寸前で愛撫を止め、ゼシカを焦らし続ける。
「こんなにぐちょぐちょに濡らして、マ○コもぱくぱくと口を開いて、
チ○ポが欲しいって訴えてやがるぜ」
「そ、そんなこと、そんなこと、あるはずがない……うう！」
執拗にヴァギナを攻められ、言葉でも攻められつつ、
ゼシカはなんとか理性を失わないようにと必死で堪えるばかり。

「もう素直になれよ。ほら、チ○ポが欲しいだろう？」
「馬鹿なことを言わないで！
これ以上の辱めなんて、絶対に許さないんだから！」
「そんなことを言っても、ココにはもうこんなに簡単に指も入るくらいだぞ？」
「くううっ……わ、私は、あなたなんかに屈したりしないわ！」
たっぷりの愛液に濡れた膣口は、男の指を難なく呑み込む。
にゅるりとした挿入感は確かに強い官能を湧かせるが、
ゼシカはそれを認めるつもりはなかった。
「今ならまだ許してあげるわ！早く、この拘束を解きなさい！！」
あくまでも抵抗するゼシカに、男は徐々に苛立ちを見せ始める。
クリトリスをつまみ、陰唇を引っ張る。
その度に喘ぐゼシカを見て、男のサディスティックな欲望が気炎をあげる。
「その生意気な態度がどこまで持つかな？
すぐにでも、チ○ポ欲しいって叫ばせてやるぜ！」
「ぜ、絶対にそんなこと……あぁああ！　いや、そこはっ、んぁあああ！！」
膣に指を埋めたまま、クリトリスにしゃぶり付く。
敏感な突起を舌先で転がし、時に吸い付いて激しい愛撫を繰り返す。
膣内に埋めた指も中でこねくり回し、膣壁を押し開いてどんどんと奥に潜り込む。
「あぁあ！　いや、イくっ、こんなのイっちゃうううう！！」
男はもはや、遠慮なしにゼシカを絶頂に導いた。
先ほどまでの焦らしもあって、絶頂感は強烈な刺激となってゼシカを襲う。
「あああああぁあああああぁあああっ！」
あまりの快感に意識が飛ぶ。
それでも理性だけは飛ばさないようにと、ゼシカは強く自分を律した。

もうろうとした意識の中で、体中がまさぐられていることに気付く。
しかしやけにまぶたが重い。
このまま目覚めない方がいいのかもしれないと思うが、
背筋をかける性のしびれに、目を覚まさざるをえなくなる。
「絶頂で気絶しまくるところも、可愛らしくていいんだがな……くっくっく」
気が付くと、そこはベッドの上。
腕を縛られていることに変わりはなく、自由に身動きは取れないまま。
「い、いつまでこんなことをする気？　私は、絶対に……うう！はああ！」
「オレの愛撫で感じまくってる女に、なにを言われてもこたえやしないぜ」
のしかかって乳房を愛撫しまくる男の顔に、また余裕が戻っていた。
鼻歌を歌いながら愛撫してくる男。その指捌きは、
これまでよりも更に密度を増している。
男が触れただけで、ビリビリとした快感が生まれてくる気がしてならない。
乳首をつままれると、少女のような愛らしい喘ぎがあふれ出た。
（なに！？体が熱い…！）
気絶している間になにかされたのだろうか。
媚薬などを使われたのかもしれない。
原因がなんであれ、今のゼシカは胸を触られているだけで
絶頂してしまいそうになる苦悩に耐えなければならない。
乳首がまるでクリトリスのように感じられる。
両方を同時につままれると、また意識が飛びそうになった。
「ほら、気持ちいいだろう？　素直にそう言えば、もっと楽にしてやるぞ」
「ば、馬鹿を言わないで……！
こんなの、全然気持ち良くなんてない…！ないわ…あぁ！！」
頑なに首を振るゼシカに、男はまた不機嫌な顔を見せる。
これまで、どんな女でも堕としてきた男だ。
ゼシカも簡単に堕とせると踏んでいただけに、拒絶されると苛立ちが沸き立つ。

さんざんに乳首をしゃぶり、軽い絶頂を繰り返させた。
荒い息を吐くゼシカの姿は淫靡で、男も性欲を抑えきれなくなってくる。
それでもまだ拒絶の意志を見せるゼシカ。
男は意固地になって愛撫を繰り返していく。
乳房から腹へ、腹から腰へ、そして股間に。
男は手も口も巧みに使い、ゼシカの全身を感じさせていく。
「ほらほら。マ○コをこんなに濡らして。これで感じてないなんて言わせないぜ？」
「はあっ！体をいくら感じさせたって…んッ！く…心までは奪えないのよッ！」
「……そうかい？　それじゃ、力尽くで奪ってやるぜ！」
「あ、ああ！？　そこは、し、痺れすぎ…！！ああ！」
感じやすくなっている体の、もっとも敏感な部分を攻め立てられる。
一舐めされただけで強烈な刺激が背筋を駆け上り、頭の中を真っ白にした。
「んぁあああ！　だ、駄目ぇえ！！　そこは、そこはっ……っ！」
ビクンビクンと跳ね上がる体を押さえ付け、
男は執拗にクリトリスを攻めまくる。
絶頂している最中にまたクリトリスを吸われ、
重なるように絶頂の波が襲いかかった。
（私イってる！　こんなに何度も絶頂しまくったら、どうにかなっちゃう！）
でも、絶対に屈したりしない。それぱかりを考えて、絶頂の波に耐える。
しかし体は反応してしまう。快楽の刺激に跳ね上がり、淫らな声を張り上げる。
気を良くした男は更に膣へと舌を伸ばし、入り口辺りをまさぐった。
「またイったな？　そろそろ気持ちいいって認めたらどうだ？」
「くうう！　わ、私は、こんなことでは……ああっ、屈しないわっ！」
「……ちっ」
クリトリスに吸い付き、前歯で甘噛みする。
同時に膣に指を突っ込み、浅いところを掻き回した。
「あああああ！！　こんなっ、こんなの！　くううっ、んうううう！！」
「イけ！　イっちまえ！　いいかげん、オレのモノになっちまえよ！」
「あひいっ！くう！ああっ！ダメッ！」
ーぐちゅぐちゅ
「あっ…あっ…あッ！」
ーぐちゅぐちゅぐちゅっ
「あああああああああッ！」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……うぅ、わ、私は……まだ……くぅ！」
「……ここまで我慢強い女ははじめてだよ」
何度も絶頂させられ、もはや息も絶え絶えになるゼシカ。
しかし心は折らず、男を睨み付ける意志を失ってはいない。
むしろ男の方が折れ、欲望を抑えきれなくなってしまう。
「オレの流儀に反するが、仕方ないか。もう、このままヤってやる！」
「くうっ！　や、やめっ……あぁ、そんなものを入れるなっ、あああ！」
男はギンギンにそそり立ったペニスを、熱くとろけたヴァギナに押し込んだ。
（ああぁ、入る！　入って来ちゃう！　こんな奴のモノが、私の中に！？）
屈辱的なことに、熱いペニスが押し込まれる快感は愛撫の比ではなかった。
挿入されただけで軽く絶頂し、奥まで押し込まれてまた絶頂した。
「ビクビクと締め付けてくるな。入れられただけでイったのか？」
「そ、そんなことは……んぁああ！！　駄目、動いちゃ……ああぁ！！」
男は容赦なく、ゼシカの膣内を蹂躙する。
腰に掴みかかり、激しくペニスを出し入れする。
ぐっちょぐっちょと響く水音の淫らさに、
ゼシカは激しい羞恥と怒り、そして官能をわき上がらせる。
「どうだオレのチ○ポは。気持ち良くてたまらないだろう？」
「こんなの全然、あぁ！　き、気持ち良くなんてないっ、ないんだからッ！」
「まだ抵抗できるのか。それも面白いな」
男は自分の流儀を捨て、激しく腰を打ち付ける。
こうなればもう、徹底的に汚し尽くしてやるのだという思いが伝わった。
「精液を注ぎ込まれても抵抗できるかどうか、まずは一発試してやろう」
「な、中は駄目！　中に出しちゃ……ぁあああああ！！」
男の動きが速まる。そしてすぐに、膣内が熱いモノで満たされた。
（あぁ、で、出てる……こんな奴の精液が、私の中に……っ！）
ペニスを絞るようにぜん動する膣。
ゼシカは快楽に弱い女の体を呪いながら、また意識を失った。

「まずは、そのでかい胸で楽しませてもらおうか。ほら、しっかりと挟めよ」
ゼシカを押し倒し、パイズリの体勢を取る。
そしてゼシカ自身に乳房を押さえさせ、自分はゆるゆると腰を振り始めた。
「しっかりと挟まないと気持ち良くないぞ？
自分が気持ち良くなりたいなら、まずはオレを気持ち良くさせるんだ」
「うう、こ、こうですか？　ん、んん……くぅ」
あれから何日も何日もイカされ続けたゼシカは
快感に負け、いつしか男のいいなりになってしまっていた。
胸の谷間に熱い肉棒が擦りつけられる。
ゼシカ自身はさして気持ちいいワケではないのだが、
ペニスを目の前にした羞恥がわき上がる。
（こ、これが……これが、もうすぐ私の中に入る……）
そう思うと、また愛液が溢れ出してくる気がする。
しかも敏感になっているゼシカは、
乳房にペニスを擦りつけられるだけで感じ始めてきた。
「あぁ、す、すごい。私、パイズリでも気持ち良くなってる……」
「くくくっ。天才魔道士といっても、しょせんは女だな」
激しく腰を前後させる男に、ゼシカは喘ぎで応えた。
ペニスから漏れ出したカウパー液がローションの代わりとなり、
胸の谷間をスムーズに行き来させる。
その快感は、この後に来る膣挿入への快楽を期待させた。
「あぁ、は、早く……これを、早く私の中に……んんっ、ああ」
「ふん。いいだろう。
れなら、今度はお前がオレをまたげ……自分で挿入するんだ」

仰向けに転がる男に、ゼシカは恐る恐るまたがる。
そして股間の位置を合わせて、ペニスをヴァギナへと導いた。
「あぁっ、入るっ！　入って来る……
おち○ち○が、私の中にズブズブ来るぅうう！」
ゆっくりと腰を下ろすゼシカ。
男はにやにやとそれを見ながら、満足げに頷いた。
「うはあああああっ！」
入れただけで絶頂しているのか、膣内がビクンビクンと脈動した。
そのあまりの締め付けの良さに、男はうめく。
それよりも激しくうめくゼシカは、淫らに歪む男の笑みに気付かなかった。
（すごい。入れただけでイってる！
愛撫なんか、全然比べものにならないくらい気持ちいい！）
密着した股間を前後左右にゆらゆらと揺らす。
それだけで男のペニスが、膣内のいろいろなところを擦りつけた。
（気持ちいい！　すごく気持ちいい！
私もう、気持ちよくなることしか考えられない！）
内で暴れるペニスの熱さ、そして圧迫感。
密着した股間同士でクリトリスが擦れ、中も外も強烈な快楽で満たされていく。
「おいおい、こんなのじゃ、全然気持ち良くないぜ？」
「え？　……あっ、んぁあああああ！？」
唐突に、男が腰を跳ね上げた。
膣最奥が突き上げられ、その衝撃が脳天を突く。
「んぁあああっ、い、イく！　こんなに激しいの、イキすぎちゃうっ……っ！」
「いいぜ、何度でもイけよ。好きなだけ楽しませてやるからな！」
言いながら、まるで踊るように腰を跳ね上げる。
ゼシカもそれに合わせ、踊るように乳房を揺らす。
（来るっ、また大きいの来ちゃう！　来ちゃう来ちゃうぅうううう！！）
もはや魔道士としての誇りも、女としての誇りもかなぐり捨て、
ひたすら淫らな嬌声をあげる。
絶頂に震え、狂喜の悲鳴が糸を引く。
「ああああああああああああああああああっ！」
そしてゼシカは、もう何度目ともしれない失神にその心を堕としていく。
そこにもう理性はなく、ただ快楽だけを求めた夢見心地の失神だった。

セティア編

セティアは、今日も兄の呪いを解くために手を尽くしていた。
良いまじないがあると聞けば訪ね、薬草があると聞けばそれを採取する。
しかしなにを試しても呪いが解けることはない。
今日もまた、兄は苦しみ続けていた。
そんなある日、立ち寄った町の神父が解呪について詳しいことを聞きつける。
しかし訪れた教会はいかにもみすぼらしく、
とてもまともな神父がいるようには見えない。
それでも、藁にもすがる思いで神父との面会を申し出た。
「ほう。お兄さんにかけられた呪いを解きたいと言うわけですね」
セティアの話を一通り聞き終えた神父は、奥から小さな小箱を持ち出してきた。
「私自身には呪いを解く力はありませんが、
この指輪の力を使えば、あなたでもなんとかなるかもしれません」
それは、呪いを特力を上昇させる指輪だという。
得体の知れないアイテムにセティアが眉をひそめるのを見ても、
神父は自信ありげな笑顔を崩さない。
（どうしよう。偽物だっていう可能性もあるけど……）
これまでにも似たようなものを使ったことはあったが、やはり効果はなかった。
しかし神父から告げられた値段を聞いて、
その程度なら失敗しても痛くはないと思える。
駄目で元々、という判断をして、セティアは神父からその指輪を購入した。

早速宿に戻り、兄の呪いを解こうと試みる。
何度か繰り返してみたものの、
特に大きな効果があるようには見えなかった。
(やっぱり騙されたのかしら)
駄目元で買った指輪だ。大きな落胆はないが、
やはり解呪に失敗すると気落ちする。
しかも、指輪のサイズが合わなかったらしく、
抜けなくなってしまう。
面倒なことになったと思いつつも、
セティアはあまり深刻には考えずに自室へと戻った。
その夜から、セティアの体に異変が生じ始めることになる。
(なにかしら……やけに体がうずく)
どうしたことか、性的な興奮がわき上がっていた。
朝も夜も関係なく、股間がジンジンとうずく。
あまりの違和感につい股間へと触れてしまったセティアは、
その瞬間、強烈な快感を覚えてしまう。
(なにこれ。ココを触るのって、こんなに気持ち良かったの!?)
兄が呪われるまで教会ですごしていたセティアは、
性の快楽には無頓着で、オナニー経験さえなかった。
それどころか、今まさに自分のしている行為がオナニーで
あることさえも分からず、指の動きをエスカレートさせていく。
(こ、ここ、気持ちいい!
ぐにゅぐにゅして、すごく濡れて……あぁ、こんなのって!)
指にまとわりつく陰唇の柔らかさが、
ぷっくりと膨れた陰核の敏感さが、セティアの興奮を高めていった。
(あぁ、なにか来る! 頭の奥まで痺れて、
意識がどこかに飛んでっちゃうっ!)
初めての自慰による絶頂に、セティアはそのまま意識を失った。

翌日も、その翌日も、体のうずきがおさまることはなかった。
絶頂してしまえば少し楽になることを覚えてしまったセティアは、
疼きの高まりと共にオナニーに耽る。
呪いを解く方法を探して町を訪ね歩いているときさえ、
隙を見つけてはヴァギナを弄くり回した。
しかし、屋外ではそう簡単に絶頂まで辿り着けない。
辛うじて軽い達成感を得ることができる程度では、
むしろ疼きが高まる気さえし始めていた。
夜、部屋に戻ってからは昼間の分を取り戻すかのように
自慰に没頭してしまう。
隣の部屋で、兄が呪いに苦しんでいる最中も、
何度も何度もオナニーをした。

セティアももう、これがオナニーであると分かっていた。
しかし分かっていてもやめられない。
兄の苦しみを察することさえできず、
ただひたすらにヴァギナを弄くるばかり。
（ああ、こんなに濡れて……クリトリスもビンビンに勃起して、
ちょっと触っただけで全身に電気が走っちゃう！）
ビクンと跳ねる体。その痙攣さえも心地好く、
また強くクリトリスに触れる。
手慣れてきたセティアは、股間ばかりでなく全身をまさぐり、
自ら乳房を揉みしだく。
（ダメ…兄さんがとなりで寝てるのに…！こんなこと…！）
クリトリスと同じように突き立った乳首をつまむと、
同じような快楽が背筋を駆け上った。
乳房はやや乱暴なくらいにたっぷりと揉みほぐすと、
じんわりとした快楽がにじんでくる。
その快楽が高まったところで乳首をつねると、
思わず声が出てしまうほどの官能があった。
（すごい。全身が性感帯になったみたい！
こんな体じゃ、いつかおかしくなっちゃう！）
激しい絶頂感に満たされながら、
セティアはこの異常の原因を考え始めていた。

体がうずき始めたのは、神父に解呪の指輪を
売ってもらってからだと気付き、
また教会を訪ねてみることにする。
指輪が外れなくなっていることにも原因があるのではないか。
しかし、まさか神父がおかしな呪いのかかった指輪を
売りつけることなどあるまい。
セティアは神父の正体を怪しむこともなく、
自ら罠にはまるようなうかつな行動に出てしまっていた。
そして現れた神父は、以前と変わらずどこかいやらしい
笑いを浮かべながら、セティアを舐め回すように見て言った。
「ふむ、どうやら指輪の力が暴走しているようですね……
正常な状態にしなければ、外すこともできません」
「正常な状態？　と、とにかく、まずは外れるようにしてください」
体がうずいて、自慰ばかりしていることはさすがに言えない。
照れるセティアを見て、神父は舌なめずりさえする。
しかしそれに気付かず、神父の言葉に従うセティア。
「なにか、おかしな症状は出ていませんか？」
「い、いえ……なにも」
「本当のことを言ってください。でなければ対応できませんよ？」
真面目そうな顔をして言う神父に、
セティアはうつむきながら答える。
「実は、か、体が妙に熱くなって……う、うずいてしまって……」
「うずく？　それは、性的な興奮を感じていると言うことですか？」
「そ、そうです……」
「オナニーはしましたか？」
「そんなことはしていません！」
「本当ですか？　隠しごとをされては困ります」
「うぅ……す、少しだけ、してしまいました」
「やはりそうですか。あなたのオナニー行為にも
問題があったようですね」
恥ずかしい告白をさせられうろたえるセティア。
神父はいかにも真面目そうな顔をして、対応策を口にする。

「それでは、指輪の暴走を抑え込んでみましょう。
私のすることに、逆らわないでください」
そう言われては頷くしかない。
後ろを向いたセティアに、神父は遠慮なく手を伸ばしてきた。
「あっ！？　な、なにをするんですか！？」
尻に触れてくる神父に、身を引いてしまう。
しかし神父は、逆らわないように、とばかり言いつけてくる。
(な、なにをする気なのかしら。まだ、体はうずいてるから、
あまり触られると変な気持ちになっちゃいそう)
どんな目的があるのか、神父は尻を撫で始める。
くすぐったさに身をよじるも、
逃げてはいけないという思いでなんとか我慢する。
「この辺りはどうですか？　ビリビリとしていますか？」
「あ、はい……痺れるような感じがします」
ならば、と神父は尻肉に掴みかかる。
セティアは思わず声をあげそうになるも、恥ずかしさから口をつぐむ。
「声を出しても構いませんよ。
下手に我慢しない方が、あなたも楽になるでしょうし」
「い、いえ……そんな。
でも、これがいったいなんの対応になるんですか？」
「指輪の暴走を止めるために必要なことなのです。
ですから、決して逆らわないでください」
真面目そうな声に、頷かざるを得ない。
しかしセティアは、神父が淫らな笑いを
浮かべていることには気付かなかった。
(どうしよう、ゾクゾクしてきた。
こんな風に、他人に触られることなんてなかったのに)
神父の指さばきは淫らで、じわじわとした快楽を与えてくる。
ときに谷間に沿わせてくる指が、尻の穴近くまで来るが、
さすがにまだそこに触れてくることはなかった。
同じく、股間に触れてくることはない。
それでセティアも、少しだけ安心してしまっていた。
これは本当に指輪の効力を抑えるもので、
決して淫らな行為ではないのだと思い込まされていた。

さんざん尻を撫で回していた神父の手が、
徐々に上にあがってくる。
じわじわとせり上がってきていた官能に
とろけ始めていたセティアは、
神父の手が乳房に触れたところでふと我に返る。
「今度は胸です。さあ、脱がしますよ？」
「え！？　そ、そんな……」
逆らってはいけない。これは必要な行為なのだ。
さんざん言われ続けてきた言葉が、
またセティアの耳元で囁かれる。
まるで呪縛の呪文のような神父の言葉に、
セティアは仕方なくされるがままになる。
ぼろりと剥き出しにされた乳房を見て、
神父はゴクリと息を呑む。しかし躊躇なく触れてきた。
「あ！　や、やっぱり、こんなこと……」
「駄目です。これは指輪の暴走を抑えるために必要なのですよ」
「他の方法はないんですか？」
「ありません。それに指輪の効果が戻れば、
解呪の力も得られるのですから」
確かに、このままでは体のうずきはおさまりはしないだろう。
自慰で何度絶頂しても、またすぐにうずいてしまう体。
このままでは、兄の呪いを解くどころか、
自分の方がおかしくなってしまう。
体のうずきの原因はやはりこの指輪にあると分かった以上、
まずはこれをなんとかしなければならない。
指輪の持ち主であった神父にすがる以外に方法がないのならば、
言うことに従わなければならないのだ。
セティアは快楽にもうろうとし始めながら、
神父の愛撫を受け入れ始めていた。

乳房を自分で触るのと、他人に愛撫されるのでは、
快楽の種類がまったく違うことが分かった。
時に激しく、時に優しく揉み込んでくる神父の愛撫は、
自分で触れるよりも何倍も心地好い。
鷲掴みにされ揉みしだかれると、恐怖の入り交じった快感がわき上がる。
かと思えば、ふわりと優しく包み込まれた。
それは安堵と官能をじわじわと沸き立たせる。
そして乳首をつままれると、甘い痺れに声まで溢れてしまう。
（いけない。本気で感じ始めちゃってる……
これは必要なことで、いやらしいことじゃないのに！）
いわば治療のようなものだ。
それで感じてしまうなど、まるで淫乱ではないか。
セティアは自らの快感を恥じ、なんとか抑え込もうとする。
しかし神父の手さばきは巧みで、快楽のツボを遠慮なく突きまくってきた。
「あぁ、あっ……だ、駄目……こんなことっ！ああッ！」
「そうそう。声を出してもいいんですよ。
快楽を恐れることはありませんからね」
じゅるりと舌なめずりする音が聞こえるが、それを気にかける余裕はない。
ただ乳房からわき上がる快感を抑え込もうと必死なセティアは、
神父の目がギラギラと淫欲に輝いていることに気付きもしない。
（あぁ、もうアソコも濡れてるのが分かる。
こんなことで、感じたりしちゃいけないのに！）
「我慢する顔も愛らしいですね。それでいいのですよ。
受け入れてしまえば、この暴走はおさまるでしょう」
「ほ、本当…んっ！なんですか！？くうっ！」
「ええ。そして、指輪の力でお兄さんの呪いも
解くことができるようになりますとも」
「わ…わかりました…ひゃうぅっ！」
神父の言葉を信じるしかないセティアは、
徐々にエスカレートする行為のすべてを承知するしかない。

「それでは、そろそろ服を全部脱いでもらいましょうか」
「は……はい」
普段なら絶対に受け入れたりしない言葉だが、今はもう神父を信じるしかない。
そして尻と乳房の愛撫で官能に熱くなっているセティアは、恥ずかしがりながらもすべての衣服を脱ぎ去った。
「すばらしい体つきですね。均整の取れた、美しい肢体ですよ」
「そ、そんなことは……」
神父は唐突に襲いかかることもなく、まずはひたすらじっくりと眺める。
その目つきがいやらしいものだと分かっても、自ら全裸になってしまったセティアは逃げることなど考えもしない。
「さぁ、その腕をどけて、あなたのすべてを見せてください」
陰部を隠していた腕を、おずおずとどけた。
まだ誰にも見せたことのない恥部を、見ず知らずの神父に見せてしまう。
その背徳感がセティアの官能をくすぐっていた。
(あぁ、駄目。アソコが濡れてるところまで見られちゃう)
神父の目が股間に吸い付けられていた。
秘部を見られているというだけで官能がわき上がり、更に愛液が溢れてしまう。ゴクリと息を呑むセティアに、神父も合わせて息を呑んだ。

神父はすぐに見ているだけでは飽き足らなくなり、背後からそっと肩に触れた。
どきりとするが、やはり逃れることはできない。
恥ずかしさを我慢して目を閉じたセティアの、その両腕が背後で拘束された。
「え？　な、なんで腕を縛るんですか？」
「くくっ……もちろん、これも必要なことだからだよ」
神父の声に、下品な愉悦が込められている。
ゆるゆると体をまさぐり始める神父。
そのこそばゆさに耐えながら、セティアは自分を騙すように納得する。
剥き出しになった乳房を、腹を、そして太ももや尻を撫で回してくる神父。
股間に手が伸びてくるのも、仕方ないことなのだと認めるしかない。
しばらくの全身愛撫の後、神父は小瓶を持ち出してその中身をセティアに注ぐ。
「な、なんですかこれは？　なにか、すごくヌルヌルとして……」
「我が教会自慢の聖水ですよ。これで、一段とまさぐりやすくなりますからね」
聖水というよりはローションに近い。
いや、そのものなのだが、快楽の熱に冒されているセティアは気付かない。
神父の手つきは更に淫らになり、尻から内ももまで遠慮なく指を滑り込ませる。
「あぁ！　そ、そこはっ……いやっ、駄目！」
「なにが駄目なんですか？　こんなにも愛液を垂れ流しているくせに…くくくっ」
股間のぬめりが聖水なのか愛液なのか分からない。
それをいいことに、神父の指がヴァギナを弄り始める。
その指がクリトリスに触れ、セティアはあられもない嬌声をあげた。

「そろそろいいッスかねぇ。俺たちも混ぜてもらいますぜ」
「え！？　な、なに！？」
セティアの目の前に、見知らぬ男が2人現れていた。
共に下卑た笑いを浮かべる男たちは、すでに激しくたぎっているらしい。
興奮を隠そうともせず、すぐさま裸のセティアに襲いかかってきた。
「あぁ、イヤ！　な、なんなの！？　いったいどういうことですか！？」
「もちろん、これも必要なことですよ……くっくっく」
本当にこれが必要なことなのだろうか。
神父の笑みは、もはや淫欲に満ちた男のものでしかない。
他の2人の笑みも同様だった。
性の興奮に彩られた笑みは、セティアの貞操感を激しく掻きむしる。
（逃げた方がいいんじゃないの？
でも、指輪の暴走を止めないといけないし……）
快楽に溶けているセティアでは、まともな思考はできない。
それを分かっているのか、男たちは強い愛撫を繰り返す。
「エロい乳首をしてるな。こんなの見せられたら、我慢なんてできないぜ」
「うそっ！ちょっと…ああああっ！」
左右からそれぞれに乳房を揉まれ、乳首をしゃぶられた。
その快感が衝撃となり、思わずあられもない声をあげさせられる。

「は、放してっ！　これ以上おかしな真似をするのは許さないわよ！？」
ジタバタと暴れてはみるものの、
男たちは意に介した様子もなく愛撫を続ける。
その愛撫が気持ち良く、結局黙らされるのはセティアの方になった。
「なにを許さないって？　ほらほら、もっと抵抗して見せろよ」
「おかしな真似をしていたのはどっちかな？
オナニーしまくってた女に言われても、なんとも感じないね」
神父ももう下品な笑みを隠しもせず、にやけた顔をセティアに向けた。
そして、ニヤニヤと見つめながらヴァギナをまさぐる。
（あ、あ、あっ！　だ、駄目っ、そこは……そこばっかり弄られたらっ！）
「こんなにぐちょぐちょに濡らして、
クリトリスも勃起しまくって、いやらしい女だな」
他の男が乳房を揉んだ。他の男が肛門を弄くり回していた。
そして神父がクリトリスをつまむ。
蓄積されていた快感の分と合わせて、激しい絶頂感がセティアを襲う。
（いや、いやいや！　イキたくないのに、イカされたくなんてないのにいい！）
叫びながら、頭の中を真っ白にする。
強烈な快感が頭の中で火花を散らし、全身に痺れを走らせる。
その絶頂の最中にも、男の指戯は止まらなかった。
クリトリスをつまみ、指先で転がす。
その刺激たるや、絶頂に更なる絶頂を上乗せする。
（すごいすごいっ！　イってる最中に、またイっちゃう！？
こんな激しいの、感じたことない！）
感じさせられたくはないが、体は勝手に反応してしまう。
絶頂による衝撃で潮を噴き、
それを手にした男はまた激しくヴァギナを指で犯す。
「ほら、我慢しなくていいんだぞ？　またイけ。イっちまえ！」
「あぁぁぁ！　い、いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
膣に指が挿入される。
その刺激で、セティアはまた強い達成感を得てしまった。

何度かの絶頂。セティアはもはや自力では立てなくなり、
男たちにもたれかかってしまう。
それをいいことに男たちはセティアを組み敷き、
更なる愛撫を繰り返す。
「はぁ、はぁ、も、もう駄目……もうやめて」
「なにを言う。お楽しみはまだまだこれからだろう」
脚をM字に広げられた理由が分からないセティアではない。
悲鳴をあげそうになるが、なんとかそれを呑み込んで耐える。
弱みを見せてしまうわけにはいかない。
しかし男たちはペニスを取り出すことなく、
ひたすら愛撫に時間をかけていた。
乳房を、乳首を、そしてヴァギナを弄くり回すばかり。
だが、それで安堵するわけにいかない。
男たちの股間は激しくそそり立ち、
下手な真似をすれば今にも犯されてしまうだろうと思える。
（いったい、どうしてこんなことに？
あたしはただ、指輪のことを相談しに来ただけなのに）

指輪の暴走を止めるために必要な行為と言われても、
これはどう考えても強姦としか思えない。
挿入こそされてはいないが、
直接女淫をまさぐられ、何度も絶頂させられている。
今もまた、クリトリスに指が伸びた。
激しすぎる快感に嬌声をあげさせられ、
その声に導かれるかのように絶頂してしまう。
もう何度目の絶頂だろうか。セティアはもう、
数えることをやめていた。

「も、もう、やめてッ！これ以上おかしなコトを……くうう！！」
「なにを言ってる。お楽しみはこれからだろうが」
「はあ…はぁ…私は、こんなコトをしに来たわけじゃ……」
「くっくっく……まだ気付かないとは、ずいぶんと愚かな女だな」
「…！　ま、まさかあなた……！」
「そうさ。この指輪には最初から解呪の力なんてない。
女を淫らにさせる、淫呪の効果しかないんだよ」
「そ、そんな！　騙したのね……あああああ！」
しかし、時すでに遅し。全裸にされ、拘束され、
しかも男3人に囲まれている状態では、逃げ出しようもない。
更に体は官能に熱くなっており、足腰に力が入らない。
それどころか男たちは、ついにその凶器をあらわにした。
「もう十分過ぎるほどにとろけてるな。それじゃあ、メインディッシュの時間だぜ！」
「や、やめて！　これ以上は……んぁあああああああ！！」
セティアが動けないのをいいことに、男はそそり立ったペニスを押し込んできた。
愛液に濡れそぼったヴァギナは、男の凶悪なものを難なく受け入れてしまう。
熱すぎるペニスが膣にめり込んで来る感覚で、セティアは軽い絶頂に達した。
「あ、あ、あ、あっ！　そ、そんな！　こんな奴らに、私の……あぁ、私の初めてが」
「へへへ、マ○コだけですむと思うなよ？　俺は、ケツの初めてをもらおうか」
「いや、やめて！？　同時になんて入るワケが……あああああ！？」
肛門を切り裂きながら、直腸にペニスがめり込んで来る。
その圧迫感に、悲鳴と涙があふれ出た。
（こんなこと許せない、許せるワケがない！　あぁ、それなのに……っくう！）
抵抗しようにも、まったく身動きが取れない。
しかも膣内と腸内までペニスで押さえ込まれている。
快感と屈辱、怒りと官能が入り交じり、セティアの心まで犯していた。
「さぁ、中でたっぷりと出してやるぞ！　俺たちのザーメンで、溺れさせてやるぜ！」
「い、いや！　そんなコトされたら、私……あぁあ、いや、やめろ！！」
男たちは腰の動きを早め、ケモノのようなうめき声をあげる。
（く、悔しい！　こんな奴らに感じさせられるなんてっ……
あぁ、犯されて感じさせられるなんて！！）
膣内で暴れ回るペニスの快楽に、頭の中を真っ白にする。
同時に、膣内も白い粘液で満たされた。次いで、直腸内にも同じものが満たされていく。
（わ、私は、絶対に屈したりなんかしないんだから……）

「んっく、ぁぁぁ

マーニャ編

ある日、カジノの支配人が持ちかけてきた話――。
それは地下のステージで踊りのショーをこなせば、
今までの負債を帳消しにするというものだった。
カジノで負け続け、かなりの借金を抱えてしまったマーニャは、
一も二もなくその話に飛びついた。
（一晩踊るだけでいいなんて、ちょろいものね）
幕を少し開けて覗くと、酒と熱気に酔った観客が
ギラギラとした視線を放っているのが見えた。
（だいぶ借金がかさんじゃったけど、
踊れば帳消しになるならちょろいものね）
カジノの特設ステージの舞台裏。
幕を少し開けて覗くと、酒と熱気に酔った観客が
ギラギラとした視線を放っているのが見えた。
「さて、それでは本日の大トリに登場してもらいましょう！
踊り娘マーニャちゃんです！」
歓声と共に、舞台の幕がするすると上がっていく――

どこからともなくアップテンポの音楽が鳴り始め、
天井から吊り下げられた水晶球が淡い光を放ちながら回る。
マーニャは腰を揺らし、豊満な身体をくねらせた。
手首や腰のアクセサリーが照明を反射してきらきらと輝く。
観客達はどよめきながらマーニャの若くしなやかな肢体を一心に見つめた。
(これこれ……この視線がたまんないのよね♪)
舞台に立っているマーニャからは男達の様子が手に取るようにわかる。
胸に、腹に、脚に視線が刺さる感触。
その高揚のまま、半身になって流し目をすると
男達から興奮の声が上がった。
口々に、マーニャが今俺を見た・いいや俺だなどと口角泡を飛ばす。
太股と脚を見せ付けるようにしながら手を這わせると、
そんな口論はすぐに止む。
(フフフ、盛り上がってるわね……
じゃあちょっとサービスしちゃおうかしら♪)
前屈みになり、胸の谷間を強調する姿勢をとると
酒瓶をつかんでいた手すらも止まった。
皆食い入るようにマーニャの身体を見つめている。
(私も熱くなってきたわ……)
慣れているはずの男達の視線と熱気に当てられたのだろうか。
いつもより身体の昂ぶりが大きいような気がした。
そう思った瞬間に、足運びが少しあやしくなる。
(……? 熱いだけじゃない、何だか動きがうまくいかな……)
体調は悪くなかったはずだ。
なのにこの熱さと、身体の奥底にある
ふわふわと浮くような心もとなさは何だろう。
(やば……!)
観客達から見ても明らかにわかるほど、舞台上のマーニャがよろめいた。
今までとは質の違うどよめきが上がり騒然とし始める。
「しっかり踊れよ!」
野太い野次が飛ぶ。
(なんで、どうして――)

体勢を立て直そうとしてもすぐに足がふらつき、
まるで酔っ払いが千鳥足になっているかのようだった。
(頭がくらくらして……熱い、観客の声が響いて……)
その時気付いた。
観客達の声の振動が最もダイレクトに
響いているのは、太股の奥であることに。

マーニャはついに舞台に膝をついた。
「ああっ、はぁ、はぁっ、は……ッ！」
荒い息を吐き、肩を揺らす。
(何、コレ……！？　身体が動かな……)
立ち上がろうとしても全く力が入らなかった。
指を動かす程度のことが精一杯で、
力をこめようとしても脚と腕はふるふると震えるだけ。
しかもその原因となっている全身を包む
圧倒的な気だるさと熱さは、股間から立ち上ってきている。
マーニャの脳裏に舞台が始まる前に手渡された飲み物が思い浮かんだ。
(変わった味のお酒だと思ったけれど、まさかアレが……)
きっと司会者を睨む。
すると彼はニヤニヤと意味ありげな笑みを浮かべた。
(やっぱり、媚薬――！)
「あ……う、ぐ……」
声をあげようとしてもそれは意味をもたず、
唾液が床にこぼれ落ちただけだった。
(どれだけ強い薬を仕込んだのよ……ッ！)
喉と舌すら思うように動かず、だらだらと唾液がこぼれ続ける。
そんなマーニャの様子を見てとり、
司会者は舞台裏にいた屈強な男達に合図した。

数人の男が舞台に現れ、椅子と手錠、縄を持ってくる。
戸惑いに観客がどよめくが、男達はそれを尻目に淡々と作業を続けた。
無抵抗のマーニャはまたたく間に
舞台上に設置された椅子に縛られ固定されてしまう。
「さて、準備は整いました！」
「これより皆さんお待ちかね、メインイベント第二部の始まりです！」

「どういう、ことなのよぉ……」
ろれつのまわらない舌をなんとか操り、司会者に抗議する。
「踊るだけで、いいって……」
「そんな虫の良い話があるわけないでしょう？」
司会者はサディスティックな笑みを浮かべながら、
マーニャの頬を撫でた。
「くっ……」
「皆さん！　この踊り娘、マーニャは当カジノで莫大な
借金を抱えております！
その借金を皆様の慈愛と寄付でもって返済しようというのが今晩の主旨！」
「まずはこの豊満な胸を揉む権利をかけて
オークション形式でお手を挙げてもらいましょう！
マーニャの胸を揉む権利、1500G、1500Gからです！」
（冗談じゃないわ！）
司会者の言葉を聞き、逃げ出そうとするマーニャ。
薬の筋弛緩の効果はゆるくなり始めているものの、
手足を縛られているせいで動くことはかなわない。
「せ、1800G！」
「1800Gが出ました！」
客も徐々に状況を把握し始めたのだろう。
一人の男がおずおずと手を上げた。
それに伴って、観客の戸惑いが波のように引いていき、
かわりに淫靡で直情的な視線がマーニャに注がれるようになる。
椅子に縛り付けられた踊り娘。
普段なら絶対に触ることのできないアイドルに
手を出すことができるという、
千載一遇のチャンスに観客の男達は沸き立った。
「さあ1800G、1800G以上はいませんか？
これは借金まみれの踊り娘を救う慈善事業なのです！
遠慮する必要はありませんよ！」
「1900G！」
「はい、そこの方1900G！」
「2000！」
「2040！」
「2040Gが出ました！　2040Gで打ち止めですね？
では落札者の方、舞台上までいらっしゃってください！」

司会者に先導され、鼻の下を伸ばした中年の男が舞台に上がってくる。
「へへ……まさか本物の踊り娘に手を出せるとはな。」
男はいきなり手を伸ばし、マーニャの胸をわしづかみにした。
「痛ッ……！」
「お客様、他のお客様方にもよく見えるよう後ろからでお願いいたします」
「おお、そうか、そうだよな」
マーニャの視界から男が消え、後ろにまわった。
姿が見えないことが余計にマーニャの不安を煽る。
「やめなさいよ、こんなバカなこと……！」
「フン……てめぇの借金を減らしてやってんだぞ？　感謝しやがれ！」
言いながら男は背後から両手を伸ばし、マーニャの乳房を持ち上げた。
形の良い胸に男の指が埋まり、醜く変形する。
「くっ……」
観客席が一瞬静まり帰った後、大きな歓声が沸き起こった。
「……」
男は夢中になった様子でマーニャの胸を揉みしだき続ける。
「う……あ……」
愛情のかけらもない、ただ玩具を乱暴に弄ぶかのような手の動き。
だがマーニャの肩はひくつき、まだ弱いながらも
確実に性感が高ぶっていることを男に伝えてしまっていた。
「どうですか？　ご感想は？」
「……柔らかくてあったかくて、最高だぜ！　ゲハハハハ！」
男は手の動きを更に激しくする。
ぐにゅぐにゅと豊かな胸が激しく形を変え、その柔らかさと弾力を見る者に伝えた。
「うぅ……くぅ……」
「おまけにこの女、感じてやがるぜ！」
「な……！？」
男が大声で言うと、観客がさらに盛り上がった。
見ず知らずの男の手によって、恩みものにされているのに昂ぶっている女。
そんな女には遠慮なく獣欲をぶちまけることも許される――
そういった雰囲気が一気に広がっていく。
「か、感じてなんか……」
マーニャの力の無いか細い声は大歓声に容易に打ち消され、誰の耳にも届かなかった。
「へへ……この感触、たまんねぇな……。胸を揉むだけで終わると思うと惜しいが、
三日三晩はオカズに使ってやるよ」
男が耳元で囁き、マーニャの羞恥を煽る。
（どうにかして抜け出さないと……）
そう思って身体を動かそうとしても椅子がぎしぎしと鳴るだけで、
その無意味な“抵抗”は男の嗜虐心をかえって刺激してしまう。
「なあ司会者さんよ。この邪魔な布をどけちまってもいいよな？」
「ええ、結構ですよ」
「そうこなくっちゃな……」
男はマーニャの胸の布に手をかけ、それをずり下げた。

男の手によって、マーニャの形の良い胸と小ぶりな乳首が露わになる。
「意外に慎ましい乳輪じゃねぇか」
男は乳首をつまみ、上下左右に引っ張った。
「あう……ッ！」
乱暴さに思わず声をあげてしまう。
そして胸に手をかけながら、人差し指で何度も乳首をこねる。
そのうちに自然と乳首が屹立して自己主張し始めた。
「いい声を聞かせてやってくれ……」
耳元で囁く男をマーニャは精一杯の気力でもって睨み返す。
（誰が声なんて……！）
男は自らの唾液でもって指をしとどに濡らし、ついでマーニャの乳首をつまんだ。
「う……」
唾液で滑りの良くなった親指と人差し指で、くりくりと乳首の側面を撫でていく。
「……あッ」
声をなんとか我慢してはいるが、
静寂に包まれている会場にはわずかな音もしめやかに響いていく。
だが声よりも明らかなのはマーニャの姿態だ。
声を我慢することに意識を集中しているぶん、背をそらせ、
腰を半ば突き出すようにしている自分の姿に気付いていない。
今の体勢だけでも十分に男を誘うものになっていた。
「へへ……強情なこって」
男が囁るように言い、指にわずかに力をこめた。
屹立した乳首を小さなペニスのように扱い、軽快にしごいていく。
「うぅ……あ、はぁ、ああ……！」
胸の先端が熱くなり、ますます血が集まってくる感覚。
勃起はよりはっきりとしたものに変化し、声もいつしか漏れ出し始めていた。
「あっ、や……、んんっ、ふ……ぅあぁッ！」
（声が、我慢できないなんて――！　こんな単純な愛撫なのに、薬のせいで……）
「おら、聞こえるか野郎ども！　こいつぁ大した淫乱だぜ！」
「や、ちが、違うぅ……！　んっ、はぁ、ひんっ！」
嬌声がはっきりと観客達の耳にも届き、無言の中に異様な精気がこもり始める。
（うぅ……こんな醜態を晒すなんてぇ……！）
がらがらと音を立ててプライドが崩れ落ちていくのがわかる。
男達の視線のなかで、野太い指の単調な愛撫ですら感じてしまう自分――。
「だいぶ盛り上がって参りましたね！　ではこのまま、
この淫乱な踊り娘の胸を舐める権利のオークションを始めたいと思います！」
「先ほどの20400Gからオークション再開です！　さあ遠慮なくお手を挙げてください！
淫乱踊り娘の胸を舐める権利、20400Gからです！」
「2100G！」
「2300G！」
「2400G！」

「ではそこの方、2400Gで落札です！　ご登壇なさってください！」
「っしゃああ！」
周囲の羨望のまなざしに見送られ、新たな男がマーニャの眼前に現れる。
そして息をつく間もないほどの勢いで胸にむしゃぶりついた。
「や……、ああっ、うく……ッ」
マーニャがあごを上げ、声を漏らし始めるのと同時に、
観客は示し合わせたかのようにまた静まり返った。
(こんなときばっかり、どうしてこんなに一致団結できるのよ――！)
嬌声を聞き、表情を見ようと観客が集中しているのが伝わってくる。
(もうあんな情け無い声をあげるわけには……ッ)
しかしそんなマーニャの意志は早くも折れようとしていた。
さっきの男とは違い、
今の男は他の観客にもサービスしようという気持ちがまるで無い。
ちゅぱちゅぱと水音が大きく響き、乳首が吸い上げられていく。
(でもそんな男に弄ばれるだけの私……)
無力な自分を強く意識すると、身体の奥に新たな火がともり始める。
それは被虐の喜びの火。
(こんなバカバカしいショーで、大勢に見られて、私は……)
こりっ――。
「ひあああぁぁぁあん！」
偶然か、それとも必然だったのか。男はマーニャの乳首を強く噛んだ。
それがマーニャの中に芽生えた被虐の灯火を炎へと変える最初のきっかけになる。
反応に気をよくしたのか、吸うばかりだった男が今度は甘噛みを始める。
「ちょっ、だめ、やっ、歯……たてたら、いやっ……！」
男の口から溢れた唾液が大量に垂れ、マーニャの胸を伝って腹にまで落ちた。
ずぞっ、ずぞぞぞぞぞっ！！！
今度はそれを吸い上げるかのように強く吸引した。
男の口の中で、乳首が圧力に引っ張られて大きくなっているような錯覚。
(やだ、そんなに吸ったら、おっぱい、出ちゃいそう……っ)
媚薬のせいもあってか、胸に血が集中していくような感覚が強くなる。
搾乳機と化した男の口が今までにない反応を引き出しているのだ。
「そろそろ妾もたけなわ、夜も更けて参りました！
次は秘所に触れる権利のオークションです！」
(そんな、まだやるっていうの……！？)
「さあ、ふるってご参加ください！　秘所をかきまわす権利は2400G！
2400Gから淫乱踊り娘があなたの指でもって痴態を晒します！」
「3000G！」
「4000！」
「おおっと4000Gの大台に乗りました！
他にお手を挙げる方はいらっしゃいませんか？」
「4050！」

「では40500のご大仁！　どうぞ舞台の上へ！」
次に舞台に上がってきた男は完全に酔っ払っていた。
酒臭い息を撒き散らしながらマーニャに近づき、
ニヤニヤと欲望にまみれた笑みを漏らす。
「うひっ……可愛い可愛い踊り娘ちゃんだなぁ。まるで夢みてえだ、うひひっ」
「さあ、遠慮なくどうぞ」
司会者に促され、男はマーニャの身体に指を這わせた。
男の太く鈍そうな指が腰布をかきわけて入ってくる。
怖気に肩を震わせながらも、マーニャは必死で睨みつけた。
「ぐひっ、怖い目だなぁ……でもそこがまたそそるんだな、ふひひっ」
(最低だわ、こんな気持ちの悪い男……！)
悔しさに唇を噛むがどうすることもできない。
男の指が股間に分け入ってくるのをただ見ているしかなかった。
「うほぉう！　ぬ、濡れてるんだな！」
男が持ち上げた指は、言葉通りしとどに濡れていた。
指をこねると糸を引いているのがわかる。それは明らかに愛液だった。
「そ、そんな、嘘……」
いくら媚薬を使われたとはいえこんな状況で濡らすほど感じているなんて――。
そう愕然とするマーニャをよそに、
男は嬉々として再び指を股間に突っ込ませていく。
じゅぶ、くちゅ、ちゅぷぷ――！
男が入り口で指を左右させるだけでありありと水音が響いていく。
男が下着や腰布を股間に押し付けると、そこからどんどん染みが大きくなる。
その様子は他の観客からも容易に見てとれた。
「やだ……あ、いやああああっ！」
もう何が何だかわからなかった。
あまりの羞恥に脳が沸騰し、意識が千々に乱れる。
男は文字通り乱暴に、マーニャの秘所を"かきまわしている"だけだったが、
それすらも快感に変わっていってしまう。
指が陰唇の形をなぞるとその形の通りに布は濡れ、影絵のように映し出す。
男が下着の布を引っ張るとその形は余計に露わになった。
いっぱいに広がり、男を誘うかのように蠢いている。
(こんなの、こんなの、私の身体じゃない……っ！
ぜんぶ、ぜんぶ媚薬のせいなんだから……！)
「うひひっ、濡れ濡れ、濡れ濡れマ○コだあ……」
(薬さえなければ、こんな奴にいっ！)

「ではそろそろクライマックスです！
ですが、これだけ身体は正直な反応をしているのに、
まだ踊り娘マーニャは反抗的な目をしていますねぇ？」
「せっかく皆さんが優しさと慈愛でもって接し、
救済策を講じているのにこれでは寝覚めが悪い！」
司会者が大袈裟な身振りで言うと、観客から笑い声が上がった。
「強情な踊り娘が素直な娼婦となってくれるよう、
当カジノがその道のプロをお呼びいたしております！
ご紹介しましょう、彼です！」
舞台袖から一人の男が現れる。
男はゆっくりと進み出て、マーニャのそばに鎮座した……。

観客が固唾を飲んで見守る中、男はゆっくりと手を伸ばした。
観客に見せ付けるかのように、あるいはマーニャ自身に見せ付けるかのように。
ゆるゆると近づいてきた男の指がついに秘所に触れる。
「ん……あ……」
男はさほど力をこめず、じっくりと秘所の形を確かめるかのように愛撫していく。
指の先だけを触れさせ、わずかな刺激を与えながらひとつひとつの箇所を丹念に探った。
やや薄気味悪さを感じるものの、大きな刺激はない。
(フン、何がその道のプロよ……全然、大したことな――)
「ふぁっ！」
男の指が入り口近くのある箇所に触ると、自然と声が漏れ出た。
しかし男はそれ以上そこを刺激しようとはせず、また元のような確かめるような動きに戻る。
(どういうつもりなの……？)
「ひあっ！」
また別の箇所に男の指が触れ、声が漏れた。
マーニャが声を漏らしてしまう箇所を男は次々と探り当て、丹念に秘所全体を検分していく。
(まずい……よくわからないけど、この男、私の感じる場所を探ってる……？)
全部で六ヶ所。
小陰唇の右に2つ。左に1つ。膣口の入り口の上、下。そしてクリトリスの右側面。
全てを確認し終えた男は、今度は左右の指を使って“感じる場所”を一気に刺激してくる！
「――へ？　や、あ、あ、あああああぁぁぁぁあっ、ひぅ、やぁぁぁあんんっっ！」
あまりに大きな刺激に、最初は何が起こったのかわからなかった。
男は指を巧み操ってマーニャの性感が強い場所を的確に刺激してくる。
「や、やだ、やらぁ！　なに、これぇ――！」
ぶしっ――。
何かが決壊したかのような音が鳴り、膣口から勢い良く愛液が漏れ出し、男の上半身を濡らした。
無表情だった男に初めて笑みが漏れる。
「ふぇ……？　いったい、どうなって――」
ぶしゃッ！
男が愛撫を続けるとマーニャはまた勢いよく潮を吹いた。
観客がその痴態に一斉にどよめき、雄叫びを上げる。
その盛り上がりは今までに見たことがないほどのものだった。
踊りを完璧にこなし、大きなショーを成功させたときでもこれほどの興奮を感じたことはない。
ただ感じている女が一人、いやメスが一匹いるだけで、観客の一体感は高まってしまうのだ。
(こんな屈辱……)
身体を弄ばれると同時に、今までの自分の精神性すらをも否定されているかのようだった。

「さてマーニャさん。そろそろ欲しくなってきたんじゃないですか？」
「な、何を言ってるのよ……っ」
「欲しくなったらちゃんと皆さんにおねだりしなきゃダメですよ？
私を犯してください、ってね」
「誰がそんなこと！」
「やれやれ、まだ素直にはなってくれないみたいですねぇ……。
踊り娘さんがその気になるまでお願いしますね？」
司会者が合図を送ると、男は頷いた。
マーニャの足を固定して観客がより見やすいようにする。
そしてさっきと同じように
マーニャが感じる場所を的確に刺激していった。
「う……く、あ……」
しかし今度はさっきのように力は込められていない。
マーニャの性感を最大に引き出す一歩手前の力で、
ゆるゆると身体を昂ぶらせるだけ昂ぶらせていく。
大きな波が訪れようとする前に、
男はさっと指を引いて時間を置いてしまうのだ。
（こ、こうやって焦らす……ってわけ、ね……）
悦楽によって思考に霧がかかっているマーニャにも
それくらいのことはわかる。
だが理解できただけに、大きな逡巡が芽生えてしまう。
男の指によって奥にこもる熱は確実に膨れ上がってきている。
端的に言うと、うずくのだ。
さんざん胸を弄ばれ、潮まで吹いた身体は
既に十分に準備が整っている。
下腹の奥が、子宮が剛直を求めている。
圧倒的な快感の到来を求めている。
（だ、だけど、罠にはめられて、こんな奴らにおねだりするなんて……）
（でも、今入れられたらきっと、とてもキモチよくって、
あいつらも踊りなんかよりずっと興奮してて……）

「うぐ……ぁ、ああ……、ひうっ！　うぅ……」
何度目になるだろう。
届きかけた軽い絶頂の直前でまた引きずり降ろされ、
マーニャはついに屈服しようとしていた。
（流されちゃダメ……ダメだけど、でも、もうもたない……！）
男の指が再度秘所に伸びようとしたとき、マーニャは口を開いた。
「……って」
「おや、どうなさいましたか？」
「待って！　こいつの手を止めさせてぇ！」
「それは、素直になるということで？」
「くっ……。すれば、いいんでしょ？　おねだりすれば、いいんでしょ！？」
「ええ、その通りです。」
そうすればもう彼があなたを苦しめることはないでしょう」
「うぅ……、お、お願いします……」
そのか細い声に司会者は肩をすくめ、男が再び指を伸ばそうとする。
もっと大きな声で言えと、無言で伝えてきていた。
「お願いします！　この会場にいる皆さん……私を犯してください……」
「さて皆さん、お聞きになりましたか？　え？　よく聞こえなかった？」
司会者はニヤニヤと笑いながらマーニャを見る。
「犯してください！　私のアソコに誰か、誰でもいいからぶちこんでエッ！！」
観客達がわっと歓声が上げた。
「さあ今度こそお聞きになられたかと思います！
では最後のオークションです！
踊り娘マーニャに挿入する権利を400Gから！」
オークションの進行すらも、今のマーニャにはまどろっこしかった。
椅子からの束縛を解かれると、進んで雌犬の格好になって男を待ち受ける……。

舞台に上がってくる男をマーニャは一心に見つめる。
「早く、早くぅ！」
腰をくねらせ、尻を振るあられもない動作を晒しながら挿入をせびった。
「へへっ……そらよ、お待ちかねのモノだ！」
男は叫び、一気呵成に奥まで貫いた。
「あ――、は、あ……ひゃあああああんっ！」
やっと訪れた明確な刺激をマーニャは髪を振り乱しながら受け容れる。
背がかくかくと震えて愛液がぼたぼたと溢れ出して床を濡らした。
「うは……どれだけ濡らしてやがるんだ、圧力で押し戻されて抜けそうだぜ！」
「やっ、だめぇ……抜かないで！　突いて、奥までぇ！」
文字通り洪水状態になっている結合部から液体が漏れ出るのにも構わず、
マーニャ自身が腰を揺らす。
ずぶっ、ずちゅ、ずぶちゅ、ずじゅうぅぅ――！
腰が動くたびに空気と水が混じりあい、下品な音が鳴った。
観客も次々に雄叫びや奇声を上げ、会場はついに狂態へと至り始める。
（みんな、見てる……私を、見てるぅ……ッ！！）
だが今のマーニャにとってはそらすらも快感の源泉となっていた。
背を折れそうなほど逸らせ、男の剛直を貪欲に受け止める。
腰が打ち付けられるたびに褐色の尻が揺れ、その振動の大きさを伝えていた。
「ああっ、いいっ、イイの……！
奥まで、きてぇ！　コレ……コレが欲しかったのぉ！」
一気にふきだした汗が散り、だらしなく開いた口からは涎が次々と垂れていく。
焦らされていたぶん、小さな絶頂が次々と訪れて脳裏で明滅した。
快感は途切れることなくやってきて、正常な思考をさせる暇は与えない。
「うぐ……そ、そろそろ、出すぞ……！」
「ああっ、私も、イく、イくからぁ……！　き、きてぇ！」
「へへっ……このまま、出しちまうからな、中で出すからな……イイんだな！？」
「あっ、いい、イイから！
きてぇ、はやく、もうイく、我慢しないで、イク――！」
「おおおうふっ！」
男がマーニャと繋がったまま身体を痙攣させる。
それと同時にマーニャも絶頂に達した。
「あ、ひぁ、入って、キ……てぇ、い、イクゥウウウウゥゥゥ！」
何よりも求めていた大きな肉悦。
それに何もかも飲み込まれ流されていく。

「……さて、夜が明けるまでには
まだお時間御座います！
次に挿入する権利の
オークションに参りましょう！」

女賢者編

ついに「悟りの書」を手に入れ、
女魔法使いは念願かなって女賢者になった。
とはいえ、たとえ賢者だろうが転職すればレベルは1から。
自分がパーティの足を引っ張ってしまうのは心苦しい。
そんな想いもあって、迅速なレベルアップのために女賢者は
危険を承知でたった一人で荒野に繰り出した……。

(そろそろMPも尽きてきたわね……仕方がない、この続きはまた明日に)
そう思って帰り支度を整え始めたときだった。
ふいにガサガサと茂みが鳴り、何者かの気配がたちのぼった。
(モンスター!?)
しかし現れたのはモンスターではなく、数人の男達だった。
ほっとしかけたのも束の間、こんな人里離れた場所に普通の人間は
足を踏み入れないということにすぐに思い当たる。
実際、男達はそれなりに屈強で、武器を携えてもいた。
(盗賊か山賊といったところね……)
「おっと……」
「ん、どうした? っておい、賢者様じゃないか」
「へへ、こりゃまずいな。見逃してもらえませんかねぇ?」
「……」
転職する前ならこんな下品な男達など大魔法の一撃で葬り去っていたはずだ。
「フン、早く立ち去りなさい」
だが、今はレベルも低くMPも無い。
舐められないように虚勢を張ってはいるが、
厄介事は起こしたくないというのが本心だった。
「なんだぁ? その口のききかたはよォ」
「おい、やめろって! 相手は賢者だぞ!?
いくら一人だからって、まともに戦ったら俺達も無事ではすまな……」
「いや、待て。もうすぐダーマだったよな?」
その言葉をきっかけに男達の雰囲気が変わった。
さっと三方向に散り、賢者を囲むように陣取る。
(――まずい)
男達は素早かった。
賢者が身構える前に、一人が有無も言わさず殴りかかってくる!

「くっ……！」
なんとか避けたが、足元がふらついている。
その隙に、別の男が背後から躍りかかった。
「！？」
男は背後から賢者にがっしりと組み付き、
手に持っていたものを賢者の口元に押し付ける。
途端にびりびりとした刺激が全身に広がった。
（これは……毒蛾の粉！）
息を止めて男を払いのけようとするが、膂力では男のほうが上だった。
がっしりと四肢を押さえられ、動くことができない。
「へへっ、やっぱりな……！　この非力さ、転職したばかりの賢者様だぜ！」
「うぶっ、く、メ、メラミ！」
「やばっ――！」
正面にいた男が身構えるが、賢者の声が虚しく響いていっただけだった。
「なんだこいつMPも尽きてやがるのか……、ビビらせやがって！」
逆上した男が賢者の腹を殴る。
「うぐ……ッ！」
「ったく、しっかり口押さえとけよな。冷や汗かいたぜ」
「ゲハハハ！　悪ぃ悪ぃ」
「低レベルなうえにMPが切れてる女賢者様か……。今日の俺達はツイてるな」
（こ、こんな奴ら、魔法さえ使えれば楽勝なのに！）
気丈に男達を睨む賢者だったが、男達はもう余裕の表情でそれを受け流す。

「そろそろ毒蛾の粉が全身にまわる頃だな」
「うむ……っ！」
男の言葉の通りだった。
全身から力が抜け、立っているのもやっとの状態になっている。
「こんなことされても抵抗できないよなぁ？」
男の手が下半身に伸び、太股に触れた。
「……！」
賢者の柔肌の感触を楽しむかのように、ゆるゆると手を上下させる。
怖気が賢者の背に走った。
反射的にその手を払いのけようとするが、腕に全く力が入らない。
「たまんねぇな……。賢者ってのは、
みんなこんなに若くて美人なもんなのか？」
「さぁな。だがこの賢者様が上玉なことだけは事実だぜ！」
別の男が手を伸ばし、賢者の胸を強く揉む。
「んんっ……！　ふはっ、あなた達、
こんなことして、後でどうなるか……！」
「どうなるんですかねぇ？」
賢者に組み付いている男が、臭い息を撒き散らしながら耳元で応える。
そして太股に置いていた手をずり上げ、スカートの中に侵入させた。
「や、やめなさ……うむっ！」
股間から“不快感”の一言で表現しきれないような気持ち悪さが立ち上り、
蛇のようになって全身をのたうちまわる。
「うぷっ、やめ、やめなさ……うぐっ、うむぅ……ッ！」
激しく身じろぎする賢者だったが、
それは毒蛾の粉のまわりを早めるだけだった。
急速に意識が闇に飲まれていき、視界が狭まっていく――。

「ん……」
「お目覚めですかね？」
目を覚ますと、すぐそばに盗賊の男の顔があった。
賢者は瞬時にさっきまでの出来事を思い出す。
とっさに逃げ出そうとするが、四肢を縄で拘束されていることに気付いた。
「無駄ですよ賢者様。まだ毒蛾の粉の効果も残っているはずですからね」
恐らく男達のアジトなのだろう。
意識を失っている際に、賢者はすえた匂いのする廃屋に連れ込まれていた。
「……離しなさいっ」
「ハハ、さすがは賢者様。目を覚ましての一言目が命令口調かよ！」
自分の置かれている状況がわかっているのかと言いたげに男は肩をすくめる。
「しかし、見ればみるほど上玉だな」
一人が感心したように言い、賢者の頬に手を伸ばす。
男のじっとりと汗に濡れた手のひらが静かな興奮を物語っていた。
「一度こんな女とヤッてみたかったんだよ……。場末の娼婦じゃなくな」
「口を慎みなさい、汚らわしい！」
「賢者様よぉ、残念だけど、あんたはその汚らわしい男達を
これから相手にしなきゃいけないんだぜ」
男は笑い、賢者の身体に手をかけた。
まず服の上からゆっくりと両の乳房を揉みしだく。
張りのあるその膨らみは、男が普段相手にしている娼婦の
だらしない膨らみとは全くの別物だった。
「たまんねぇぜ……」
熱に浮かされたように言う男の瞳に、ギラギラとした欲望の色が灯り始める。
「そ、その手をどけなさいッ！　さもないと……」
「さもないと、なんだよ？」
言いながら、別の男が賢者の二の腕を粘っこく撫でた。
「くっ……」
「賢者様が転職前だったら、俺達なんかがかなうわけなかっただろうな。
でもな、レベルが低くてMPが尽きてるなら、
いくら賢者様だろうがそこらの女子供とかわりゃしねぇんだよ！」
言って、男は賢者の唇をふさいだ。

「んんっ！？」
ぶあつい唇の不快な感触。
もちろんそれだけでは済まず、
ねっとりとした唾液にまみれた舌を
口腔に割り入れられてしまう。
（汚い、けがらわしいっ！
こんな奴に唇を奪われるなんて……！）
毒蛾の粉の効果がまだ色濃く残っており、
男の舌を噛むこともできない。
「へへ……最高だぜ、このオモチャはよ……！」
（オモチャ……私が、この、私が……？）

その言葉に呆然とする賢者を尻目に、
男達は賢者の服に次々と手をかけていく。
あっという間に賢者は裸にむかれ、
その美しい肉体を露にさせられていた。
ヒュウ、と一人の男が口笛を吹く。
「見ろよ、このキレイな身体」
「大方、元は魔法使いだろう。生傷の一つもありやしねえ」
「わざわざ俺達を楽しませるために、
キレイにしてくださってまあ！」
男達の言葉の通り、賢者の身体には
傷らしい傷はほとんど無かった。
おまけに程よく筋肉がついて引き締まり、
肌の瑞々しさを見るものに伝えている。
それは今まで最後列でパーティに守られてきた証拠であり、
仲間がそれだけ彼女の呪文を信頼していた証拠でもあった。
その信頼の絆とも言える肉体に男達は次々と手を伸ばす……。

「賢者様の生乳だぜ！」
下品な言葉を発しながら、一人がいきなり乳房を口に含んだ。
「くあっ！」
噛噛に暴れようとしても、毒蛾の粉の効果と男の腕力によって
押さえつけられて身じろぎすることすらかなわない。
「く……うう、あ……」
男の口に、自分の胸が弄ばれているのを見ることしかできなかった。
生暖かい感触が胸の先端に伝わる。
男の舌が蠢いているのがちらちらと見えた。
（な、舐められてる……）
毒蛾の粉の効果の副産物だろうか。
最初は男が触れているところの感覚はほとんど無かった。
しかし自らの目で男がしていることを確認し、
自覚するとじわじわと新たな感触が立ち上る。
その感触は毒蛾の粉の効果とよく似た、ぴりぴりとしたもの。
だから気付きにくかったのかもしれない。
だが女賢者の鋭敏な感覚は、毒蛾の粉の効果と
男が与えてくる感触に明確な区別をつけ始めていた。
（な、何！？　何なの、コレ……！）
痺れという意味では毒蛾の粉と同じだが、その痺れは“熱”を持っていた。
胸の先端から特に強く感じるその熱が脊髄を這い、脳へと伝わる。
それと同時に思考にぼんやりと霞がかかった。
「へへへ……イイ表情をするじゃねぇか」
別の男がニヤニヤと笑いながら良い、賢者の股間に指を押し付ける。

「そ、そこは……！」
「……濡れてるぜ、賢者様」
「――！」
賢者の身体がびくりと震え、顔色が羞恥に赤く染まる。
――実は男の言葉はほとんどブラフだった。
確かに濡れている。濡れてはいるが、それはほんの僅かな〝湿り気〟と言ったほうが正しいもの。
だが男がそのブラフをかますことによって指の滑りが良くなった。
羞恥心、そして屈辱が賢者の性感に火をつけ始めたのだ。
「見かけとは違って淫乱な賢者様だぜ……」
男は調子付き、さらに言葉を重ねる。
「そんなはず、無い……わ、私は、賢者なんだか、ら……」
「ハハハ、今となってはそれも怪しいんじゃないですかね？　これじゃあ賢者の格好をしてる遊び人と変わりやしねえ」
「くぅ……！」
男の下卑た言葉が強く胸に刺さる。
しかし、胸に刺さったはずの言葉の刃は、やがて心臓を優しく締め付けるような甘い痺れに変わってしまうのだ。
男達があざけるたびに彼女のプライドは崩れていく。
かつての気高い魔法使い、そして栄誉ある賢者としての今。
だがそのもっと奥の根幹から〝女〟としての部分が這い出してくる。
「ククク……本格的に濡れてきやがったな」
いつしか賢者の秘所からはとめどなく愛液があふれだすようになっている。
男が指を差し出すとその入り口はすんなりと男の指を受け入れた。
「ふぁ、ああ……ッ！」
「うは、良い締め付けだぜ！」
指を少し奥にまで進めると、異物の侵入を感じ取った膣口がきゅうきゅうと締まる。
「いや、だめぇ！　ぬ、抜きなさい、その指を……、ふぁ、あああぁぁぁぁッ」
賢者の言葉をさえぎるように、胸に吸い付いていた男が乳首を甘く噛んだ。
「いい加減その命令口調をやめたらどうなんだ？　ええ、賢者さんよぉ」
「だ、黙りなさい、下衆の盗賊風情が……！」
「ハッ、その下衆にいい様にやられてるのが今のあんたじゃねぇか」
言いながら、男は見せ付けるようにねっとりと胸を舐める。
「いや、良いんだよ。この女、そうやって強気に出て俺達の怒りを買いたいんだ」
――そのほうが嬲ってもらえるからな、と男は続けた。
「何をバカな！　そんなわけ……」
否定する賢者だったが、実際は明らかに男の言葉に反応していた。
嘲笑的な言葉を投げかけられる度に秘所がひくひくと震え、新たな愛液を分泌させてしまっているのだ。
「へへ……。だが、そろそろ素直になってもらうのも良いんじゃねぇか？」

「それもそうだな……」
一人が首肯して指を抜くと、もう一人も乳房から口を離す。
男達は体勢を変え、賢者の股を開かせた。
「こ、こんな格好させて……！」
「へへっ、わかるか？　このだらしなく開いてるのが、賢者様のマ〇コだぜ？」
「――！」
男は指を器用に使い、賢者の秘所を押し広げたり閉じたりを繰り返す。
するとニチャニチャとはしたない音が鳴り、
いっぱいに溢れていた愛液がとろとろと垂れた。
（こ、こんなになってるなんて……）
下腹の奥にかっと熱さがこもり、
それがじわじわと四肢の端にまで広がっていく。
「そして……これが賢者様の神聖なるクリトリスだな」
言って、男は指で陰核をピンとはねた。
「ッ！？」
その途端に、今まで感じていた熱さとは全く別種の強烈な衝撃が脳裏を叩く。
息を呑んだ賢者の反応に気を良くし、
男は指先でトントンと何度もクリトリスをノックした。
「ふあっ……うっ！　あはぁ！　や、やめ……ん、くううう！！」
髪を振り乱し、もだえる賢者。
全身がおこりのようにがくがく震えだす。
だがその震えを見て取ると同時に、男は指の動きを止めた。
「ふぁ……？　ん、ふう、は……ぁ、はぁ……」
荒波から急に放り出され、賢者は虚ろな目で呆ける。
――それから数秒。刺激が消えてやっと理性の色が目に宿り、
続いて羞恥に頬が赤く染まった。
「今……イキかけただろ？」
「ば、バカな！　何を言って……ひぃん！」
強気に男を睨む賢者だが、指がまたクリトリスに触れると
あられもない声をあげてしまう。
「おいおい、すごい濡れ方じゃないか」
「ゲハハハ！　どろっどろに濁った本気汁だぜ、これは！」
（な、なんでこんなに感じて……！？）
男達は喜色と嗜虐のこもった笑みで、賢者の姿態を見つめた。
「よし、賢者様の高貴なここを舐めて差し上げろ」
「お安い御用だ」

一人が頷き、賢者の秘部に顔を近づける。
「だ、だめ！」
「フゥーッ」
男はまず陰核に息を吹きかけた。
それだけで賢者の身体ははしたなく反応し、
背を逸らせて腰を高く上げてしまう。
続いて男は舌を伸ばしてねっとりとクリトリスを舐め上げた。
「ひぅ……ッ！　はぁ、んぁあああん！」
舌の刺激は指での刺激よりも不器用で弱いもの。
だが一番単純に快感に直結する
“下から上にクリトリスをなぞる”という行為には適している。
男が何度かその動きを続けると、
勃起したクリトリスが皮を押し退けて顔を出した。
「あ――、か、は、ひぁぁ、んんっ……！　ん、や、だ……めぇ……！」
さわさわとした舌の感触が一気に大きくなり、
賢者の身体はしっとりした汗に濡れ始める。
「うん、あぅ、ふぁ……！　ひぐ、ああ、あぁぁあぁ、ん……！」
声を我慢することも、四肢の震えを抑えることもできない。
「ふぁ、ああ、あ、あ、ああ……！」
賢者の嬌声が断続的で力のこもったものになり、昂ぶりが男達にも伝わった。
「あ、ああ……！　……ふぁ、え……？」
けれど、その昂ぶりが高みに達する前に男はクリトリスから口を離してしまう。
（あ、あと少しなのにどうして……？）
「へへ、俺達は賢者様と違ってバカだからよぉ、
イキたいときはそう言ってもらえないとわかんねぇからさ、
よろしく頼みますよ？」
「……ッ」
男達はサディスティックな笑みを浮かべながら賢者を見下ろした。

「だ、誰があなた達なんかに……！」
賢者は吐き捨てるように言う。
「努力もせずに他人を虐げて奪うような盗賊に私は負けないっ！」
「つたく、物分りの悪い賢者様だな」
口では呆れながらも、男の口調から喜色は消えていない男は
また賢者の股間に顔を近づけ、ゆるゆると舌を動かす。
ただ、さっきよりも舌に込められる力は大きくなっていた。
（負けない……負けないんだから……ッ！）
それでも賢者は唇を強く噛んで刺激に耐え続ける。
ぎゅっと握った拳が白くなっていることが、賢者の意志の強さを表していた。
――ずず、ずそそそっ！
痺れを切らした男が、舐め上げる動きをやめて秘所に強く吸い付く。
「くっ、あ、ふぁ……っ！」
しかし、その刺激の強さがかえって賢者に余裕を与えた。
（こ、こいつらも焦ってる……？）
弱い刺激だけを与え続けられたらまずかったかもしれないが、
相手を見る冷静さが生まれたことによって快感の峠が少し遠ざかる。
それを男達も感じ取ったようだった。
「強情な賢者様だな。その意志の強さに免じて、今回は見逃してやるよ……」
肩をすくめ、一人が縄を解く。
「え……？」
「おい、本気かよ？」
「けっ……仕方ねえ」
男達は目配せをしあいながら、賢者から手を離した。
一転して自由になり呆然とする賢者。
（よくわからないけれど、これは逃げるチャンス……？）
訝しいものを感じながらも身体を起こして逃げ出そうとする。

「あ……」
だが甘かった。
毒蛾の粉の効果がまだ残っており、
一瞬は立ち上がったもののすぐに四つんばいになってしまう。
「く……ふぅ……ッ」
「おや、どうしたんですか賢者様？　そのようなメス犬のような格好をして――！」
男が笑いながら言い、賢者の腰を後ろから掴んだ。
「な……！？　や、やめ」
「オラッ、誇り高い賢者様にご褒美だ！」
「きゃっ、ひ、あぁぁぁぁぁぁあんッ！」
男は隆々と勃起した肉棒を、バックの体勢から一気に賢者の膣内へと突き入れた。
「ハハハハ！　きゃっ、だってよ！　全く可愛らしい賢者様だ！」
「はぅ、うあ、な、なんで……見逃す、ってぇ……！」
「ククク……嘘に決まってんだろ？　間抜けな賢者様よぉ！」
「そ、そんな、ひど……うぐ……」
男達の言葉に踊らされた屈辱が賢者の心を染めていく。
せっかく冷静になりかけていたのに、浅はかな一言に騙されてしまうなんて――。
「おらっ、動くぞ！」
「ひゃっ！　ああっ、だめ、今は……く、うぅ……！」
パンパンと男が腰を打ち付けると同時に、
さっきまで焦らされて昂ぶっていた身体が貪欲に悦楽を求め始める。
「ああっ、い、うぅ……はぁ、ああ、ん……ッ！」
「犬みてぇに後ろから突かれる気分はどうだ？」
「おーおー、ぐちょぐちょになって汁が溢れまくりじゃねぇか。
これじゃあ犬以下だろ」
男の言葉がまた甘い痺れとなって胸に刺さり、
肉茎の快感と共に賢者の脳髄を焼く。
「くっ、イイ締め付けだぜ……！
おまけに何か言われるたびにきゅんきゅん反応しやがる！」
「そんな……ち、違うぅ！　うぅ、ああっ、ふあああっ、い、イぅ……！」
「んん？　どうした、また締まったぞ？」
「あ、はぁ、うぐ……ひぃん！」
（だ、だめ、頭の中、真っ白で……何も考えられな……）
そくそくとした快感が押しては引き押しては引きしつつ、
徐々に高みへと到達しようとしていた。
「はは、もうイキそうなんだな……？
あれだけ我慢したものな、いいよ、イッちまえよ！　俺も、そろそろ――」
「い、いや、ダメ……キ、ちゃう、
く……う、あ、イやあああぁぁぁぁぁッ！！」

その後も男達は
ＭＰを回復する余裕を与えないように
休まず賢者を犯し続けた…。

SEXIAL BATTLE D2　フルカラー同人誌版
製作／クリムゾン　http://www.alles.or.jp/~uir
印刷／大陽出版　株式会社
２００９年　３月２５日発行

魔力を吸い取られる罠にはめられて、
何もできずに豊満なバストに
快感を与えられ続けるゼシカ

兄の呪いを解くためと騙されて、
何もしてなくても愛液があふれるような
淫乱なカラダに改造されてしまうセティア

転職したてでレベルが低いときを狙われ、
本来ならば相手にもならないような盗賊に
屈辱的に犯される女賢者

舞台の上で椅子に拘束され、
恥辱のオークションの
商品とされてしまうマーニャ

● 18歳未満の方は購入できません